

米紙における脱ニュース化と記事形態の変化 Diminishing News Orientation of leading US Newspapers and Transformation of the Form of News

谷川 幹¹
Miki TANIKAWA

¹ 国際教養大学大学院発信領域 Akita International University, Global Communication Practices

要旨…英語の新聞記事は5W1H型(要約型)のリードで始まり、記事を下るごとにより詳細な内容を加えていく「逆ピラミッド形」を採る、と一般的に理解されている。だが、過去数十年の間に報道メディアの世界で生じた大きな変化のうねりの中でそういった形態の新聞記事は概ね姿を消している。本研究では米有力紙の内容分析を通じて要約型のリードを擁したストレートニュースが過去数十年間の間に大幅に減少したことを確認した。それに伴って何が増加したのか、またニュースそのものが変質している中で新聞(米国)の持つ役割や機能について理論的な観点から分析を試みた。

キーワード 新聞研究(米紙)、5W1H型リード、逆ピラミッド型新聞記事、脱ニュース化

1. はじめに

一般的に「ニュース」(news)とは発生したばかりの出来事の報告である理解されている。これを日々発行されている日刊紙(news-paper)に当てはめるならば、前日に発生した事件や出来事を取り上げた記事を中心に紙面が構成されているということになる。だが、近年アメリカの新聞やテレビ等の報道メディアにおいて、報道内容が伝統的なストレートニュース(straight news、以下SNと省略)ではないもの、即ちフィーチャーや分析的な記事(features & analysis)の比率が増加しているとされている(Fink & Schudson, 2014; Weldon, 2008)。90年代後半以後躍進したオンラインメディアを中心として報道媒体の多様化や競争の激化によってニュース形態の変化の動きが2000年前後を境に加速していった。スピードで劣後する日刊新聞は競争上の観点から「何が起こったか」のみを趣旨とした単純なニュース報道から退いていると考えられるのである。

一方で新聞記事は出来事の報告(news-report)であり、5W1H型のリードに始まり記事を下るごとにより詳細な内容を加えていく「逆ピラミッド」の形を採るといった記事形態の伝統的な理解は修正されていない。(Benson & Hallin, 2007; Hartsock, 2007; Pottker, 2003) SNが減少し、本来形態が異なるfeatures & analysis(谷川 2010)が増加している中で、理論と現実の記事テキストとの間で齟齬が生じている。また、新聞が独自の付加価値を追求する中で発掘型のフィーチャーや企画物、ニュース分析等に軸足を移しているのならば、歴史的にニュース報道の主要な担い手とされてきた新聞とは何か、ニュースとは何かという根源的な問いが生じてくると思われる。米国では5W1H-逆ピラミッド型の記事の書き方は、19世紀後半から20世紀前半にかけて確立して行った客観的で中立的なジャーナリズムの考え方とその報道姿勢を象徴するものとして発展していった歴史的経緯があり(Hartsock, 2000; Schudson, 2001) その後も一世紀に亘って継続した。こうした形態の記事が大きく減少しているのならば、客観報道を旨とする米新聞ジャーナリズムの在り方自体が歴史的な転換を迎えていることになる。

本研究では、有力米紙の内容分析を通じて新聞の記事形態の変化等を調査した。調査結果はすでに米学術誌 *International Journal of Communication* (2017)等にて発表した。¹ 今般は日本語で調査結果を概略的に紹介すると共に、調査終了後ここ数年(～2019)の最新の米紙の記事内容・記事形態の状況について述べたい。

尚、ニュース通信社などの報道機関はこれまで通りニュースの第一報を配信することを旨としており、事実の要約を冒頭に配した逆ピラミッド型の記事がニュース一般から消滅したわけではないことは指摘しておくおかなければならない。寧ろニュース報道という空間の中で、時代の変化に合わせ各種メディアがその役割をシフトしていったという解釈が正しいであろう。その意味

では報道メディアはそれぞれの媒体の強みを活かしながら存続を計ると指定する *Medium theory* あるいは *Affordance theory* (下記参照) の論理が考慮されることとなる。

2. 研究の方法

米有力紙である、*The Washington Post*, *Los Angeles Times*, *International Herald Tribune* (現 *New York Times* 国際版)を過去 25 年に遡って (1988 年～2013 年) 一面記事²の内容分析を行った。(N=1260) その際、先行研究を参考にしながら作業定義を設定し「生じたばかりの出来事の報告を中心とした記事」である SN とそうでないもの、すなわち“features & analysis”に分けた。また SN で報道される「生じたばかりの主要な出来事」(事実上の 5W1H リード) が何パラグラフ目に出現しているかを記録した。その理由は SN でありながら題材としている主要な事実がリードに登場しない記事が増加している傾向が指摘されていたからである (Fink & Schudson, 2014)。こうした変則的な SN 記事³が発生した理由は当研究の主題と密接に絡んでいる。SN は本来、生じたばかりのニュースを効果的に伝達することを趣旨としているが、上で述べたように「付加価値」を付け、読み手の関心を弾く為に、記事の冒頭で「主要な出来事」を要約的に述べるのではなく、文章・構成上の工夫としてフィーチャー記事で使われるようなレトリックや逸話を取り込んだリードがより多く採用されている (Fink & Schudson, 2014; Weldon, 2008; 谷川 2010)。そういった特殊なリードに続いて、或いはそうしたリードに織り交ぜる形で主要な出来事への言及が続く形態が一般化している。こうした特殊な SN の具体的な事例については発表時に提示する。

3. 得られた知見

調査した三紙において、いずれも SN の比重が低下していることが明らかになった。1988 年に一面の約 70% (三紙平均) を占めていたのが、2013 年には 35%程度 (同) に低下している。(図 1 参照)

図 1 英語論文から抜粋

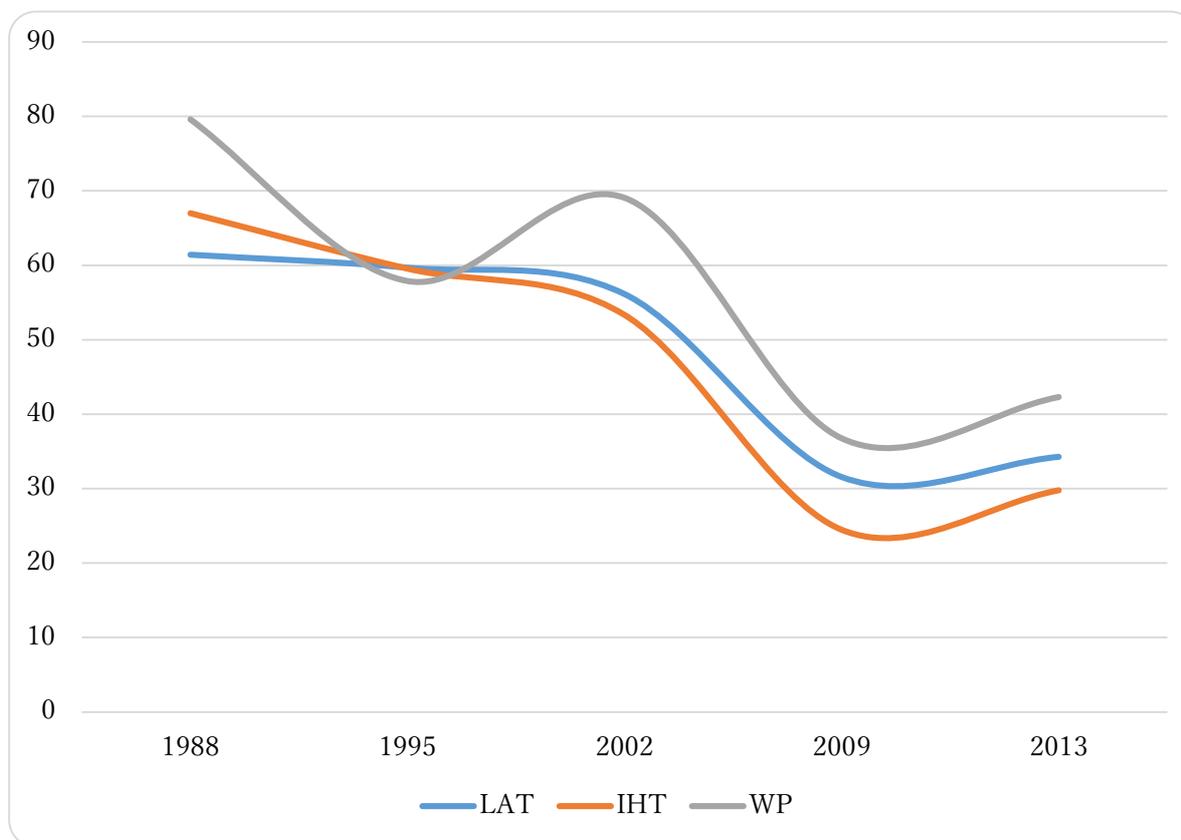


Figure 1. Changes in SN percentages. LAT = Los Angeles Times; IHT = International Herald Tribune; WP = The Washington Post

表1 英語論文から抜粋

Table 1. Straight News with Delayed Time Reference as a Percentage of Total Number of Straight News Articles on the Front Page.

Newspaper	1988	1995	2002	2009	2013
LAT	7.14	14.1	9.1	12.5	70.0
IHT	21.7	15.1	37.5	33.3	64.3
WP	9.76	10.9	9.0	12.0	24.2
Average	12.88	13.37	18.52	19.28	52.85

Note. LAT = Los Angeles Times; IHT = International Herald Tribune; WP = The Washington Post.

また、SN の中でも冒頭に主要な出来事を記述していない記事、即ち前述の「変則的な SN 記事」が 1988 年には三紙平均で 13% 程度しか存在しなかったが、以後徐々に増加し、2013 年には SN の半分以上を占めるに至った。(表 1) つまり上で述べた SN でありながらも逆ピラミッド形を採らない変則的な SN 記事が大幅に増えており、SN が一面記事の 35% に低下した事実と考え合わせると、新聞記事(一面記事)の大半はこれまで考えられてきた 5W 1H 型—逆ピラミッドの構造を採っていないということになる。上で指摘したように、新聞はネットメディア等との競争の観点から、単純な事実の報道から features & analysis 等に入れ込むことで独自色を出そうとしていることが主な原因であろう。変形 SN についても、生じたばかりの「主要な出来事」への言及はあるものの(通常記事の第三、第四パラグラフまでには登場する)、記事のそれ以外の部分において、描写的(descriptive)というよりも、分析的(analytical)であったり、また事件の背景説明に注力していたりするなど、分析記事、解説記事の構造と極めて類似していることも少なくない。

日刊新聞は時事報道については事実の報道を主体とするのではなく—そういった記事も存続しているが—読み手が既にネットやテレビ等でその事実を聞き及んでいることを前提として、解説的(analytical)、背景説明的(contextual)な記事に重心を移していると考えられる。新聞がこのように「脱ニュース化」しており、事実のみの報道から退いているのであれば、これまで新聞メディアが担ってきたとされる報道の機能そのものが変質していることになる。

だが、新聞の報道内容のこうした変化・変容は、Medium Theory (Meyrowitz, 1994) あるいは Affordance 理論(Nagy & Neff, 2015; Tenenboim-Weinblatt & Neiger, 2015)が予想するところと整合的である。即ち、新しいメディアとの競争や社会のニーズの変化に応じて、既存メディアは自らの強みを活かしながら進化すると仮定する理論である。それは例えば、嘗てテレビが「新メディア」として登場した時、ラジオは多彩な音楽番組や音声情報を強化といったこと等が挙げられるであろう(Alexander, 1985)。

新聞はネットメディアや放送メディアとはスピードで劣後する。そこで、より優れた記者リソース、即ち専門的知識やネットワーク力、調査報道力などを活かしてフィーチャーや解説記事、その他の企画記事で力を発揮しようとしている、と見ることができる。従って、こうした新聞の変化はニュース報道の空間の中で、役割や機能をシフトさせているということになる。

Weaver & Wilhoit (1996) はジャーナリストの職業的役割論 (professional role conception) において、記者は情報提供 (information dissemination) や分析者(analyzer)としての役割などがあるとした。こうした理論、分類を受けて Cassidy (2005) は新聞記者とオンラインメディアの記者との比較研究をサーベイ調査を通じて行い、前者はより分析者としての役割を重視し、後者は情報提供の機能を強調する、との調査結果を出した。新聞記者や編集者達は自らの強みとしてそのような認識を持っており、オンラインメディアとの競争が激しくなるにつれて、そうした自意識が単純な情報提供の役割よりも分析力や調査力、解説力により傾斜した紙面づくりに方向づけたと考えることができよう。

新聞の持つニュース提供機能の変化という観点から重要と思われるのは、これまで歴史学や政治学などにおいて新聞は一次資料としての価値があるとされ、歴史的な事実を裏付ける文献として用いられたり、政治的な出来事の参照や記録 (scorecard) として使われてきた。新聞記事が事件や諸般の出来事において「何が起こったか」の概略を必ずしも記事冒頭で明確に述べず、むしろ事件の概要を読み手が既知であるとの前提で書かれるようになっていっているのであれば、新聞が持つ事実の参照記録としての位置づけや価値に疑問が付されることにもなりえよう。実際に、近年発生した重要な国際ニュース、例えば 2011 年 3 月の東日本大震災や 2015 年 1 月のパリでのテロ事件(シャルリー・エブド襲撃事件)、また直近ではエチオピアでの航空機墜落事故やスリランカの爆発テロ事件 (2019 年 3 月、4 月) などの新聞報道の第一報を見ても必ずしも事実の概要がヘッドラインやリードで独立し

て理解できるようになっていない記事が散見される。⁴ また、文体の変化にも着目したい。前述したように米国では19世紀後半以後、事実を客観的に伝達することが新聞報道の使命となり、5WIH型の記事とその文章作法はそれを象徴するものとされ、記者の主観や解釈的言説 (interpretive discourse) が介在することが許容される大陸欧州型のジャーナリズムと一線を画してきた。

(Benson & Hallin, 2007; Chalaby, 1996) 近年の米有力紙のSN記事は、上で述べたように文体が多様化しており、時には要約型のリードを踏襲しているながらも、表現上の工夫や潤色、また解釈や記事の意義説明などが織り込まれた表現が多く散見される。即ち、客観的な事実の描写のみを旨とする (facts only) 基本スタンスから転換していることは明確である。発表ではこうした文章スタイルの変化・変遷を具体歴な事例と共に提示、解説を行う。

参考文献

- Alexander, R. (1985, June 9). Recalling how radio survived the arrival of TV. *The New York Times*.
- Benson, R., & Hallin, D. C. (2007). How states, markets and globalization shape the news the French and U.S. national press, 1965-97. *European Journal of Communication*, 22(1), 27-48.
- Cassidy, W. P. (2005). Variations on a theme: The professional role conceptions of print and online newspaper journalists. *Journalism & Mass Communication Quarterly*, 82(2), 264-280.
- Chalaby, J. (1996). Journalism as an Anglo-American invention: A comparison of the development of French and Anglo-American journalism, 1830s-1920s. *European Journal of Communication*, 11(3), 303-326.
- Fink, K., & Schudson, M. (2014). The rise of contextual journalism, 1950s-2000s. *Journalism: Theory, Practice & Criticism* 15(1), 3-20.
- Hartsok, J. C. (2000). *A history of American literary journalism: The emergence of a modern narrative form*. Univ of Massachusetts Press.
- Hartsok, J. C. (2007). "It was a dark and stormy night": Newspaper reporters rediscover the art of narrative literary journalism and their own epistemological heritage. *Prose Studies*, 29(2), 257-284.
- Meyrowitz, J. (1994). Medium theory. In D. J. Crowley & D. Mitchell (Eds.), *Communication theory today* (pp. 50-77). Palo Alto, CA: Stanford University Press.
- Nagy, P., & Neff, G. (2015) Imagined affordance: Reconstructing a keyword for communication theory. *Social Media + Society*. July-December: 1-9.
- Potter, H. (2003). News and its communicative quality: The inverted pyramid—When and why did it appear? *Journalism Studies*, 4(4), 501-512.
- Schudson, M. (2001). The objectivity norm in American journalism. *Journalism: Theory, Practice & Criticism*, 2(2), 149-170.
- Tenenboim-Weinblatt, K., & Neiger, M. (2015). Print is future, online is past: Cross-media analysis of temporal orientations in the news. *Communication Research*, 42(8), 1047-1067.
- Tanikawa, M. (2014) Transformation of the print: Analyzing the diminishing news orientation of leading American newspapers. *Paper presented at AEJMC Conference*, Montreal, QC, Canada, 7 August.
- Tanikawa, M. (2017). What is news? What is the newspaper? The physical, functional and stylistic transformation of print newspapers, 1988-2013. *International Journal of Communication*, 11, 3519-3540.
- Weaver, D. H., & Wilhoit, G. C. (1996). *The American journalist in the 1990s: U.S. news people at the end of an era*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Weldon, M. (2008). *Everyman news: The changing American front page*. Columbia, MO: University of Missouri Press.
- 谷川幹 (2010) : 英文記事に見られる「非要約型リード」と主観的ジャーナリズムの諸相、『Lingua』(上智大学一般外国語教育センター) 第21号 pp. 45-72.

補注

- ¹ 英文タイトルは参考文献 Tanikawa (2017)を参照。同論文以外にはTanikawa (2014) が本稿の内容の基となっている。同じく参考文献を参照。
- ² 一面のみを内容分析の対象としたが、一面が新聞の内容全体を代表しているか否かについては、これまで米ジャーナリズム研究、特に内容分析手法に纏わって様々な議論されてきた。詳しくは当発表の元となった Tanikawa (2017)を参照。
- ³ 英語論文では“Straight news with delayed time reference”と記した。「表1」で使用。同表現を使用している理由については原論文を参照。
- ⁴ この点についてはやや敷衍が必要であろう。新聞編集者は必ずしも報道する内容を読み手が既知であると思われるので、それを省くのではなく、読み手の既視感を緩和する為に書き方を工夫し、その結果単純な事実の概要の提示に終始するような文体を回避する、即ち伝統的なストレートニュースの書き方から逸脱する、という方がより正確であろう。